花のPreserver～薔薇の花～

すももっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
花のＰｒｅｓｅｒｖｅｒ～薔薇の花～

【Ｎコード】
Ｎ８０９１Ｎ

【作者名】
すももっち

【あらすじ】
いじめられっ子の小学五年生のユウ。突如その前に現れたのはジンと名乗る金髪の美青年だった。
「俺はユウのモノだよ」
「ユウは世界で一番何よりも大切な、俺のたった一輪の薔薇」
ユウを救うジンと、“花と花を守るプリサーバー”をめぐる人間模様のお話。

訪れた救いの日-1

いじめ

弱者を攻撃すること

別に仕方がないと思った。
もうどうしようもないと思ってた。
我慢すればいつか終わることはわかってたから。

でも違ったんだ。
僕はずっと誰かが助けてくれるのを待ってた。
だからあの時、僕は泣きそうなほど嬉しかったんだよ。

＊＊＊＊＊

僕の居場所は常に飼育小屋の裏。
半分押し付けられたように飼育係をやらされた僕以外に、にわとり小屋なんて誰も近付こうとはしないから。
にわとりの世話なんて、きっと誰がやってるか誰も知らないんだろうと思う。
別に知って欲しいから言ってるんじゃない。
それよりも、知らないでいてくれて良かったと思うぐらい。

知っているのはにわとりのコロッケぐらいかな。
ここは僕の安息の地。
何かされた後は、ここで隠れて一人で泣いてる。
「うっ……、うっ……ぅ……」
今日はノートを盗られて、ビリビリに破られた。
僕の好きな国語のノートだったから、すごく悲しかった。
僕が何したっていうの？
僕が悪いことをしたの？
どうして誰も助けてくれないの？
誰か誰か……。

ダレカボクヲタスケテ

心の中で叫ぶと同時に、普段ほとんど鳴かないコロッケがコケコッコーと鳴いた。
不思議に思って僕が泣き腫らした目を上げると、知らない黒い足が小屋の前にいた。
さらに上を見上げると、真っ黒のスーツに金色の短い髪の男の人だとわかった。
「ユウ」
「え……？」
「どうしたの、ユウ？」

「僕のこと、知ってるの……？」

「知ってるよ。俺はユウのモノだから」

「僕のモノ……？」

「ユウのモノだよ」

その男の人の言ってる意味は少しもわからなかったけど、その人の笑顔が、空気が、僕の心をあったかくした。
頬にできた涙の跡を手の甲でぐいっと拭い、立ち上がった。
それでもその男の人との身長差はかなり大きかった。

「あなたは誰……？」

「ジン」

「じん……？」

「うん。ねぇユウ、どうしたの？どうして泣いてるの？」

ジンは僕にゆっくりと近付きながら問い掛けた。
いじめられたなんて、カッコ悪くて言えないよ……。
僕がうつむいて何も言わないと、ジンは僕の前に方膝をついて、僕を下から見上げるように首を傾けた。

「ユウ？」

ジンの声は大きくはないし低く胸に響いてきたけど、優しいと思っ

た。
あったかい。
なんでこんなに優しいの？
ジンは骨張った手の親指で僕の頬の絆創膏を優しくなぞり、少し目を細めた。

「ここ、ケガしてるね。誰かにやられたの？」

「えっ……、と……」

言えない。
恥ずかしくて言えないよ。
ジンみたいな美人なひとにそんなカッコ悪いこと言えない。
これ以上弱い男にはなりたくないよ。

「ユウ、教えて。誰がやったの」

これは昨日できたもの。
下校途中に木の棒を投げられて、少し擦った程度の小さな傷。
長袖のパーカーで隠してるけど、庇おうとした腕にも同じような傷が二つほどあって、走って逃げようとした時に転んでできた傷も膝にある。
こんなのいつものことだもん。

「……大したことじゃないから……」

僕にはそう言うのが精一杯だったのに、ジンは首を横に振った。

「違うよ。俺は誰がユウにこの傷を負わせたのかを聞いてるの。誰にやられたの？クラスのやつ？」

「なんで、そんなこと知りたいの……？」

ジンの詰め寄り方が普通じゃない気がして、質問を質問で返した。
ジンは僕の頭を優しく撫でながら口を開いた。

「ユウを傷付ける奴が許せないから。だからユウがされた同じことをやってやる。いや、それじゃ甘いね。二倍にも三倍にも、十倍にもして仕返ししてやる」

ジンが言ってることは、子供ながらに物騒だと思った。
でも僕はすごく嬉しかった気がする。
僕のためにそう思ってくれる人がいることが、すごく嬉しくて、やっぱりあったかかった。

「……ダメ、なんだよ」

「ダメ？」

「人にやられてイヤだったことを、人にしちゃダメなんだ。だから仕返しなんてやっちゃダメ」

ジンは目を丸くして、パチパチと瞬きをした。
心底驚いたみたいな、そんな反応だった。

「それでユウはいいの？」

「うん」

「泣くほど辛いのに？」

「……うん」

「イヤじゃないの？」

「イヤだけど……。仕返しとは、違うと思う」

されたことと同じことをするなんて、僕にはできないと思う。
あんな酷いこと、僕には絶対できない。
しちゃいけないことってわかる。
ジンは一度うつむいてから、また僕を下から覗き込むように見た。

「ユウがそう言うなら、仕返しはしない」

あぁ、よかった。
なんでか自分でもわからないけど、そう思った。
そしてジンは微笑みを僕に向けた。

「ユウは真面目な子だね」

まじめ？

「まじめ、かなぁ……？」

「うん。真面目だ」

「そんなこと言われたの、はじめて」

「そう？」

「うん」

ジンはクスクスと笑った。

一緒になって笑うことはできなかったけど、いつの間にか涙は止まってた。

訪れた救いの日-１（後書き）

お立ち寄りいただき、ありがとうございます。
作者のすももっちです。

気分更新になると思いますが、どうぞ気長にお付き合いくださいませ。
評価・感想・ご意見お待ちしております。
最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

2

「帰ろう、ユウ」

ジンのゴツゴツした大きな手が僕の前に差し出された。
白くて大きくて、握り返すとやっぱりあったかい。
ジンは反対の手で、近くに投げ出された僕のショルダーバッグを取って肩に掛けた。

「どこに帰るの？」

「ユウの家。と言いたいとこだけど、これから少し時間ある？」

ジンは背が高い。
僕が小さいこともあるだろうけど、一生懸命顔を上に向けないとジンと目も合わせられない。
普通にしてたらジンのおへそと目が合っちゃうぐらい、大きな身長差。
それでも僕は頑張ってジンと目を合わせ続けた。

「あるよ。でもあんまり遅くなると、お母さんが心配するから……」

「大丈夫。少しだけ話したいことと来て欲しいとこがあるだけだから」

知らない人と話してはいけない。
知らない人についていってはいけない。

でも僕には一切のためらいもなかったんだよ。
ジンは知らない人じゃないんだよね？
それを証明してるみたいにジンと繋いでいる手は決して解けなかったし、熱を持って熱いぐらいだった。

＊＊＊＊＊

ジンは「少し歩くよ」と言ったきり、学校を出てからもう5分ぐらい口を開かない。
どうしよう……。
いろいろ聞きたいのに……。
聞いてもいいかな……？
ジンは怒ったりしないかな？

「なに？」

「えっ……」

「ずっと見てたでしょ？俺のこと」

ジンには三つ目の眼があるんじゃないかと思った。
なんでわかったんだろう？
ジンはそんな僕を見てクスクスと笑った。

「今からどこに行くのか不安？」

「不安じゃないよ。ジンは僕を怖いとこに連れてったりしないでしょ？」

「しないよ。俺はユウを傷つけたくないからね」

「あのね、その……」

なんて聞けばいいんだろう。
ジンはいくつ？
ジンは何する人？
ジンはガイジンさん？
僕のモノってどういうこと？

「ジンってなに？」

なに？って……。
言葉が足りないことは自分でもわかるのに。
なんて聞けばいいかわからなかった。
聞きたいことがありすぎて、何から聞けばいいかもわからない。
ジン？
ジンってなんなの？

「すごい質問だなぁ。さすがユウだ」

ジンはにこにこしていた。
ジンは怒ったりしないかもしれない。
僕のお母さんみたいに、いつも優しいのかも。

「本名は湯川（ゆかわ）　陣一郎（じんいちろう）。２１歳、大学生」

「じん、いちろう？だいがくせい？」
「そう。でもユウはジンって呼んでね」
「なんで？」
「大切すぎるから」
あったかいような気もしたけど、なんだか恥ずかしかった。

ジンが連れてきてくれたのは、初めて見るような大きな日本風な家。
びっくりはしたけど、不安が全然なかった訳じゃなかったけど、ジンが手を離さないでいてくれたから、それでよかった。
怖くはなかった。

「ジンの家？」
「まぁ、第二の家みたいなものかな」
だいにの家？
それって家なの？違うの？
ジンは僕の手を引いて二人で一緒に門をくぐった。
門から玄関までは少し遠くて、池とか木とか花とかがたくさんあった。
テレビで見たことはあるけど、生では初めてだからすごいなぁと思った。
「すごいでしょ、この庭」

「うん！」

「気に入った？」

「うん、すごく！」

ジンは優しく僕に微笑みを向けた。

「それは良かった。きっとこれから何度も来ることになると思うから」

「え？」

どうして？と僕が聞く前に玄関が突然開いたので、僕とジンの視線はそちらに向いてしまって聞けなかった。
出てきたのは茶色のツンツンした髪の男の人。
ジンみたいに真っ黒なスーツを着ていた。

「陣！……あれ、お前の花は？なに、その子供」

荒い息のその人は、僕とジンを交互に見比べて言った。
ジンの花ってなんだろう？
お花屋さんに行く途中だったのかな？

「この子はユウ。ユウが俺の花だよ」

ジンが僕の背中に手を添えて、少しだけ前に出した。
僕がジンの花？
いったいなんのことなんだろう？

「冗談言ってる場合かよっ。どっからどう見たって小学生だろうが！」

その茶髪の男の人の切羽詰まった感じにびっくりして、僕の肩はびくっと跳ねた。
急に大きな声を出されるのは苦手だ。
ジンはそんな僕の様子に気付いたのか、僕の頭を優しく撫でた。

「あんまり大きな声を出すなよ。ユウがびっくりしてるじゃないか」

「お前が変な冗談言うからだろっ」

「冗談なんか言ってないよ。ユウは俺の花。世界で一番何よりも大切な、俺のたった一輪の薔薇」

僕がジンを見上げると、ジンはにこにこと微笑みながら頭を撫でてくれた。

ジンは僕のことが好きなのかな。
だからこんなに優しいのかな。
そうだったら嬉しいな。
僕もジンのことは好きになれそうだから。

2（後書き）

まだ登場人物は少ないですが、どんどん増えていきます。
私も名前が覚えられるか心配なぐらいです。

ジン何者だ！

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

3

茶髪の人は名前を志樹(しき)と言った。
ジンと同い年で、同じ大学に通う友達とも言っていた。
「俺は秋桜(こすもす)のプリサーバーだ。陣と同じようなもん」
ぷりさーばー？
ジンと同じ？
いったい何を言っているのかわからない。
「志樹、ユウにはまだ何も説明してないんだ。そんなこと言ったってわからないよ」
「は？説明何もしないでここまで連れてきたのかよ？」
「俺の口からそんな複雑なこと、ユウには言いたくないよ。俺はいつでもユウの拠り所でいたい」
「……それをズルいって言うんじゃねぇの？」
「言わないよ。言うのが俺だから」
「どーゆー根拠だよっ」
ジンと志樹の言い合いを聞いていると、二人は本当に友達だということがわかった。
そうやって二人で話していてもジンは僕の手をずっと握ってくれていたから、僕は何の不安も心配も抱かなかった。

僕の存在を忘れないでいてくれる。
邪険に扱わないでいてくれる。
それがこんなに安心することだとは思わなかった。

「まずは中に入れてくれる？志樹。いつまでもユウに立ち話なんて失礼だろう」

「失礼って……」

志樹はぶつぶつと不平不満を漏らしていたけど、ガラガラっと音のする引き戸の玄関を開けてくれた。

大きくて立派な家は、玄関もやっぱり広い。
その広い玄関には黒い靴がたくさんあった。

「ごめんね、ごちゃごちゃしてて。ユウ、大丈夫？」

「大丈夫。この家は大家族なの？」

「うーん、そうと言えばそうなんだけど。今日は特別かな」

「特別？」

「お通夜だったからね」

「えっ……！」

僕は靴を脱ぐ動作をピタリと止めた。
僕だってお通夜をどんな時にやるかぐらいは知ってる。

人が死んじゃった時だ。
だからジンも志樹も真っ黒なスーツを着ていたんだと納得した。
「気にしなくていいよ。その部屋には行かないし」
「え、行かないのかよ」
そう声を上げたのは、すでに靴を脱いで上がり込んでいる志樹だった。
ジンも靴を揃えてから志樹のとなりに並んだ。
「もうお香は上げたし、今はもっと重要なことがある。雅彦には悪いと思うけど」
「雅彦かよ。ここは達也って言うべきなんじゃねぇの？」
「俺は死んだ人間よりも死なれた人間の方が哀れだと思うよ。置いてかれるなんて最悪」
「うっわ。陣、お前って絶対歪んでる」
ジンはその志樹の言葉には何も返答せず、未だに靴を脱げないでいた僕を振り返った。
ジンの目は真っ直ぐ僕を見つめてくるから、逸らしちゃいけないような気がしてしまう。
「ユウは俺を置いていったりしないでね」
そう言ってジンは笑ったけど、その言葉を言うのは僕の方だと思った。

そんな意味も込めて「うん」と首を縦に振ると、ジンは嬉しそうにクスクス笑って、「ありがとう」と言った。
ジンは僕の手を握ってくれたので、僕たちは家の中でも手を繋いで歩いた。

「久遠さんは奥の部屋？」

「あ、あぁ……」

ジンは廊下を進んで、ずっと奥の部屋を目指しているようだった。
志樹も僕たちの後に慌てたようについてきた。

中は本当に広くて、廊下はずっと長かった。
ジンが手を繋いでいてくれてよかった。
きっとこの手のおかげで心細さを感じてないと思うから。
ジンは目的の部屋の襖の前で足を止めた。

「ここ？」

「うん。今から会う人がいろいろ教えてくれるから」

「ぷりさーばー、とか？」

「そうだね」

ジンは腰を落として、僕と目の高さを合わせた。
そして僕の両肩に手をのせ、優しくほほ笑えんだ。

「僕の花はユウで間違いない。ユウは薔薇だ。胸を張って、自信を持って断言すればいいからね」

「ジン？」

「心配いらない。俺を信じてくれるね？」

そんな言い方はズルいよ。
信じる意外に選択肢なんかないじゃない。
僕はジンを信じられるほど知らないけど、疑うほども知らない。
だから頷く意外にはできないんだよ。
ジンはにっこり笑って立ち上がり、襖を開けた。

畳み張りの部屋の中央には、向き合って座る二人の男の人がいた。
黒い和服を着た男の人たちは、僕たちを振り返り、片方の人はにこりと微笑んだ。
もう片方の人は逆に、眉間にシワを作った。

「やぁ、陣一郎。随分と可愛らしい方を連れているね？」

微笑んだ男の人は、しゃべり方も声もすごく優しそうだった。

「開ける前の声掛け一つもないとは、どういう了見だ。分をわきまえろ」

シワを作った男の人は、やっぱり怖そうな人だと思った。
怒鳴ったりしないからまだ大丈夫。
しかしジンはまったく気にした様子を見せることはなかった。

「ユウ、自己紹介して」

「え？あ、若槻憂です」

「憂くんか。素敵な名前だね。私は久遠厘矢（くおん りんや）です。こっちは稀矢（まれや）」

優しそうな男の人は厘矢さん、怖そうな人が稀矢さん。
厘矢さんは黒い長い髪を一つに縛っていて、常にニコニコとしているきれいな男の人。
稀矢さんは黒い短髪で、肌は少しこんがりしている。
切れ長の目は厘矢さんと違い、常に鋭く光っていた。

「で、憂くんは私に何か用事かな？」

僕がジンを見上げると、ジンはにこりと笑ってから厘矢さんに視線を向けた。

「ユウは俺の花です。薔薇の花ですよ」

二人は正反対だった表情を同じにし、目を丸くして僕とジンを見つめていた。

3（後書き）

いろんな名前が飛び交ってますが、この先大丈夫なんだろうか……？
ぜひ覚えてやってください。

次話でいろいろ謎が解けると思います。
予定は未定は言わずもがな。
最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

4

驚いた顔からいち早く元に戻ったのは稀矢さんだった。
稀矢さんはジンを睨み付け、その言葉も刺々しいものをジンに突き付けた。

「ほんの子供を連れてきたかと思えばそんなことを言うのか、お前は」

「事実です。俺の嗅覚は間違いなくユウを示していた」

「嗅覚だと？こんな子供から薔薇の香りがしたというのか？」

「ユウを貶すのはやめてください」

ジンが僕の手をぎゅっと強く握ったので、僕はジンを見上げた。
ジンはずっと優しい顔しかしていなかったはずなのに、今は苦しそうな、悔しそうな顔をしていた。
苦しいの？
辛いの？
怒ってるの？

「やはり貴様など薔薇のプリサーバーには……」

「よさないか、稀矢」

厘矢さんのそのたった一言で、稀矢さんもジンも口を閉ざした。
ジンはまだ苦しそうな顔をしている。
ジン。

ジン！

「ジン」

強くジンを呼びたかったのに、僕の声はすごく弱々しかった。
それでもジンは僕を振り返ってくれて、にっこりと笑いかけてくれた。
無理して笑顔を作ってることがわかったのに、僕はそれ以上何も言えなかった。

「まずは座って話さないかい？それからじっくり陣一郎の話を聞こうじゃないか。憂くんの話もね」

厘矢さんは大人だと思った。
ジンよりも稀矢さんよりも、もっとずっと大人なんだと思う。

「志樹は小夜（さよ）のお迎えに行っておいで」

「え、でもまだ終わってない時間だし……」

「行っておいで、志樹」

厘矢さんは強い口調じゃなかったし怖い顔でもなかったけど、志樹は「わかりました」と小さく言って退室した。
みんな厘矢さんには適わないのかもしれない。
厘矢さんってすごい人なのかな……。

＊＊＊＊＊

僕とジンは横に並んで座り、その向かい側に厘矢さんと稀矢さんが座った。
普段あまりしない正座だけど、違う座り方をできる気もしなかった。
みんな正座なのに、自分だけ違うなんてできない。
また子供って言われちゃう。

「ここは久遠家の本家、そして私が現在の久遠家当主だよ。そして花は牡丹」

「ぼたん……？」

ぼたんの花ってどんな花なんだろう？
花はぼたんって？

「決められた人には決められた花がある。私は牡丹であるように、君が薔薇であるように」

「ジンにも決められた花があるの？」

ジンを振り返ると、ジンはにこりとして首を横に振った。

「俺に決められた花はないよ。俺は花を守る側だから」

「守る？」

「ジンや稀矢は花じゃない。花のプリサーバー、つまり守る人ってこと。生まれた時から花となる私たちと同じように、彼らも生まれ

た時から守る花を持つ」

「生まれた、時から……」

じゃあ僕は生まれた時から薔薇の花だったってこと？
いや、そんなのおかしい。
僕は人間だし、薔薇の花なんて滅多に見ないもの。

「なんで僕が薔薇の花、なんですか……？」

「なぜ自分が花になるのか、その答えは私も知らない。ただ花にはその花特有の香りというものがある」

「か、香り？」

「私には牡丹の、君には薔薇の香りがね」

匂って、いるのかな……？
今まで意識したことないけど……。
薔薇の匂いってどんな香りがするんだろう？
試しに自分の腕の匂いを嗅いでみたが、特にこれといった匂いはしない。
そんな僕を見てか、厘矢さんはクスクスと笑った。

「本当に香りがする訳ではないのだよ。感覚のようなものに近いらしいが。というのも、花同士ではわからないのでね」

「ジンにはするの？僕の匂い」
「するよ。俺のすごく好きな匂いが」

なんだか複雑な気分だった。
自分で自分の匂いがわからないので何とも言えないが、人によったらキライな可能性だってある。
りっちゃんがつけてる香水の匂いは、僕はあまり好きじゃないし。
もしかしたらジンは気を遣っているだけかもしれない。

「そのことについてなんだが……」

「え？」

厘矢さんを見上げると、先ほどまでの微笑みとは違い、難しい複雑そうな顔をしていた。

「花には蕾の時期がある。その時には香りはしないものなのだ。しかし君からは薔薇の香りがするとジンは言っている。どうやら嘘ではないようだが……」

「僕はまだつぼみってこと……？」

「いや、香りがするのだから開花したのだろう。しかし子供が花というのは今までにないことでね。いくら早くても高校生ぐらいからが一般的なんだよ」

わかったような、わからないような長い説明。
僕は薔薇で、でも小学生で、でも匂いがして……。
僕はここに来たらいけなかったのかもしれないと、ふとそんな思いがした。

「ユウ」

ジンが僕の名前を呼んで、その大きな手で頭を撫でてくれた。

「ユウは俺の花だよ。それは真実だから。胸を張っていいんだ」

ジンはどこまでも僕には優しかった。

涙が出そうだったけど、がんばって食い止めた。

ジンの前ではもう泣きたくないと、そう思ったから。

4（後書き）

中途半端に大まかな説明を厘矢さんがしてくれました。
稀矢さんはきっと説明の間中、眉間のシワを濃くしていたでしょうね。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

幕間：薔薇の（前書き）

本編とは少し離れたお話です。
読まなくても話は繋がります。

幕間：薔薇の

それは突然、唐突に訪れる現象。
なんの前触れも予兆も予感もなかった。

「きた」

「は？」

俺の言葉になのか、俺が突然立ち上がった行動になのか、隣りに座っていた志樹（しき）がぎょっとしたような声を上げた。
俺はそんなものに構わずに席を立ち上がり、足速にその部屋を出た。
慌てたように志樹も後を着いてきて、先までいた部屋の注目を集めたのは容易に想像がつく。
しかし、そんなことはどうでもいいのだ。
今の俺にとっては、それはあまりにも小さすぎる出来事にすぎない。

「おい、陣っ。突然なんだよ。足でも痺れたか？」

「見つけたんだ。俺のマスター」

一切立ち止まることなく玄関まで向かう。
無駄に広い和装のこの家が、今では煩わしいとさえ感じた。
いっそ靴も履かずに行ってしまおうか？
しかしそんな考えはすぐに打ち消した。
靴を履かない初対面の男なんて怪しすぎる。

「え、まじかよ！？つうか、こんな時にって言った方がいいか……？」

やっと玄関にたどり着き、自分の靴らしい靴を無造作に履いた。
どれもこれも真っ黒で、どれが自分のかも定かではないが、間違えてもこの際気にしない。

「こんな時だからかもしれないな」

靴を履いて、その状態のまま振り向かずに志樹に話し掛けた。

「と、言いますと？」

「こんな時だからこそ、俺のマスターは俺を呼ぶんじゃないかな、とね。こっちの都合なんかお構いなし」

「それってめちゃくちゃめんどくせぇじゃん……」

「ほら、俺って振り回しタイプ好きだし」

「そこから調教してくのがってあれだっけ？うっわ、いつ聞いても趣味わりぃ……。俺ほんと陣の“花”じゃなくて良かったわ」

志樹の言い様に、思わず吹き出した。
こんなところで不謹慎だとは思うけど。

「ちょっと！陣一朗くん、志樹くん！お通夜の最中なのよ！？」

廊下の向こうから中年の女がこちらに歩いてきた。
ドスドスと音を響かせながらやってくるその姿は、さながらピンクの怪獣のようだった。

「げっ、倉田せんせぇ……」
「じゃ、あとは任せたぞ、志樹君」
「え？あ、こら陣！卑怯者ぉ！」
ここで足止めを食らう訳にはいかない。
早く、早く。
マスターの元へ、早く。
俺の、俺だけのマスター。

＊＊＊＊＊

匂いは確実にそこからしている。
しかし心は急いているのに、足は歩みを完全に止めてしまった。
すでに成人になった自分が躊躇なく入るには憚れる場所、市の小学校だ。
なぜ小学校なのだろうと疑問に思ったが、小学校にいるのは何も小学生だけではない。
正門で待ち伏せていればいづれ会えるのだろうが、待っている心の余裕がなかった。
とにかく会いたい。
一刻も早くこの目で確認したい。
話したい。
触れたい。
これではまるで恋ではないか。

「……大差ないか」

けっきょく躊躇した割に俺はあっさりと正門をまたいだ。

匂いのする方へと進んでいく。
なぜか人とはすれ違わなかった。
授業中なのか、あるいは下校後なのか。
なんにせよありがたいことだった。
怪しいと判断されて摘み出されたら面倒だ。

匂いの発信源は校舎内ではないようだ。
匂いの方へ進んでいくと、だんだんと学校の敷地内の奥まった方へと向かっている。
こんなところに人がいるのか？
そんな一抹の不安さえ抱きたくなるような場所。
しかし匂いはそちらを示しているのだから、自分の嗅覚を信じて進しかない。
進んだ先にはにわとり小屋だった。
まさかにわとりと言うことでもあるまいな……。
ふと視線を向けると、小屋の向こう側に黒いショルダーバッグが転がっている。
人がいるのか！
ショルダーバッグに近付くと、横に名札がくっついている。

「若槻憂……」

口に出すとしっくりきた。

嬉しいような、暖かいような、昔から知っていたような。
そんな高揚感が胸を埋め尽くした。
間違いない。
俺の花、薔薇はこの人で間違いない！

「ひっく……ひっ……」

小屋のさらに裏側から泣き声が聞こえる。
普通にしていたら聞こえないぐらいの、小さな小さな声。

守る。
守るよ。
俺が守ってあげる。
だから泣かないで。

「ユウ」

＊＊＊＊＊

「ねぇジン」

「なに、ユウ」

ユウが身長に見合わない俺の顔を一生懸命に見上げてくる。

その仕草一つも可愛らしいけど、俺は膝を曲げて目線をユウに合わせた。

「なんでジンは初めて会った時に僕の名前を知ってたの？」

「うーん」

どうしようかなぁ？

本当のことを言ってもいいけど、それじゃ詰まらないよね。

「ユウが俺の花だからかな。なんかユウの顔見たらわかっちゃった」

「え、そうなの！？」

「うん。この子の名前がユウだー、って」

「わぁ、すごい！ジンは僕のことなんでもわかっちゃうんだね！」

俺は少しの優越感に浸って、

「ジンはすごいなぁ。僕もそんな風にジンのこと、わかりたかったなぁ」

「……」

残りは大きな罪悪感。

いつか真実を話そう。

ユウが許してくれそうになるまで。

「ごめんねユウ」

「？？？」

ユウにはウソをつくべきでないことを学んだ。

幕間：薔薇の（後書き）

ジンの目線にたった幕間でした。
これからも区切りのところに、こういったスピンオフ的なものを盛り込みたいと思っています。
どうぞこれからも読んでやってくださいませ。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

新しい日常 - 1

ねぇジン。
ジンは僕と出会ってよかったと思う？
僕っていじめられっ子で、泣き虫で、頼りないから、ジンには迷惑ばっかりかけてると思うんだ。
そんな僕だけど、僕はジンに会えてよかったよ。
まだジンのことは知らないことだらけだけど、知りたいと思うもん。
もっともっと。

＊＊＊＊＊

「おい若槻、なんだよそれ」

「え……。キーホルダーだけど……」

いじめの主犯である田中くんは、朝登校したばかりの僕をどついた。
黒のショルダーバッグには、昨日の帰りにジンがくれた薔薇のキーホルダーがついている。
田中くんはそれのことを言ってるのだと思う。

「ちょっと寄越せよ」

「やっ、ダメ！これはダメ！」

普段僕の口からは出ないような強い声が出た。
それだけ僕は必死だったんだ。
ジンからもらった物だもん。
取られたくない。
触らせたくない。

「これは……、これは、僕の大切な物なんだ……！」

震えていたかもしれない。
だってすごく怖かったから。
でも、渡せない。
これは絶対渡せないんだ。

「てめぇ、いつからそんな生意気になったんだよ！あぁ！？」

それでも怖いものは怖い。

助けて。
昨日みたいに、お願い。
僕を助けてジン！

「おい！」

響き渡る声は、知らない声だった。
でも僕の前に立ちはだかって、明らかに僕を守ってくれている。
ジンほど大きくはないけど、とても大きい存在に見えた。
六年生かもしれない。

「なにやってんだよ、おまえ。こいつになんか用かよ」

まるで僕のことを知っているかのような口調だった。
また、だ。
ジンも僕のことを知っていたように、この人も僕のことを知っている。
僕は知らないのに……。

「お、おまえこそ、な、なんだよっ……」

田中くんはあからさまに声を上ずらせた。
怖いのかもしれない。
相手は上級生だから、仕方ないと思うけど。
田中くんみたいにどっしりとした体格ではないのに、どうしてか大きく見える。
君は、だれ？

「今後こいつになんかしたら、ただじゃおかないからな」

スカッとした。
全然違うけど、ジンに似てると思った。

田中くんは悔しそうに顔を歪めながら走り去って行った。
その後ろ姿を見送りながら、六年生の男の人は僕を振り返った。
ほんの一年しか違わないのに、すごく大人っぽく感じた。

「おまえ、大丈夫？」

もう二度と奪われないように、僕はバックを抱き締めて、キーホルダーを握り締めた。
これは、ジンなんだ。

これがあれば、ジンはいつもそばにいるんだ。
だから、だから……。

「若槻憂だろ？」

「なんで僕のこと……」

君は、だれなの？
君は、もしかして……。

「廉浬（れんり）。ジンちゃんからおまえのこと頼まれた」

「ジンから……？」

「おまえのこと助けてやれってさ。憧れのジンちゃんから頼まれたら断れないじゃん。だから今助けた」

ジンが僕を？
助けて、くれる……？
僕が何も言わずに廉浬くんを見上げていると、廉浬くんはにやりと笑って僕の頭をガシガシと撫でた。

「安心しろ！学校ではオレが、それ以外はジンちゃんが守ってくれる！もう心配ないぞ！」

満面の笑みでそう言う廉浬くんは、すごくかっこよく見えた。
そして、泣きたくなるぐらい嬉しくて、どうしようもなくジンに会いたかった。
会って、「ありがとう」って伝えたい。
伝えても伝えても伝わり切らないぐらい、ありがとうを伝えたい。

でも、その前に。

「廉浬く……、さん。ありがとう」

「くんでいいよ、別に」

廉浬くんは照れ臭そうに、でも嬉しそうに微笑んだ。
暖かみは、人にもらうだけじゃない。
人にあげることでも、暖かくなることができるんだよ。
それを教えてくれたのは、僕を守ってくれる君たち。

「オレももっと大きくなったら、ジンちゃんみたいにプリサーバーになるからな！おまえはオレの花じゃねぇんだけど、練習だと思って守れってさ」

廉浬くんは厘矢さんたちがいた、あの大きな家に住んでいると言った。
廉浬くんのお父さんが厘矢さんのお兄さんだから、厘矢さんとは親戚だと説明してくれたけど、いまいちわからなかった。
でも、ジンのことを尊敬しているということはわかった。

「だからな、さっきみたいにいじめられたらオレに言えよ」

「うん。ありがとう」

素直に言えたことが嬉しかった。
僕はきっと、今、幸せなんだろう。
花である意味はわからない。
何をしたらいいのかも、どうするべきなのかも。

でも、でもね。

花で良かったって思えることは、いいことだよね？

新しい日常 - 1（後書き）

いまどきの小学生のいじめは、もっと高度なものな気がしますが……。

その辺は申し訳ないです。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

2

学校を出れば、ほら。
君がいる。

「ユウ、おかえり」

抱き付きたかった。
でもそんなことしたら、きっとビックリするでしょ？
君にイヤがられたりしたら、僕はもう立ち直れない。

君のそばにいたいの。
ジンのとなりは暖かいから。

「ジンちゃん！」

校門まで一緒に来た廉浬くんは、僕がやりたかったことをいとも簡単にやってのけた。
ジンも当たり前のように受け止めた。

「俺、今日ちゃんと憂を守ったぞ！」
「そっか。偉かったな、廉浬。ありがとう」

廉浬くんは照れくさそうに「へへっ」と笑った。

ダメだよ……。
ヤダ……。

そこは僕の場所。
ジンは僕のモノなんでしょ？
ダメ！

「うわっ、なにすんだよ憂！」

僕は廉浬くんを押し退けるようにしてジンの懐に飛び付いた。
ジンのとなりは僕の場所。
ジンの手を取っていいのは僕だけ。
この想いはなに？

「ユウ、おかえりなさい。一緒に帰ろう」

ジンは僕の頭を優しく撫でた。
ジンを独り占めにしたいって想いを持ったことが、なんだか少し恥ずかしい。
だからジンが大きな手を僕に差し出してくれたけど、僕は黙って握るだけにしておいた。
何か言うにしても、きっとカッコ悪い言葉しか出てこないと思ったから。
廉浬くんが「陣ちゃんも自分の花には甘いんだ」と拗ねたように言ったが、ジンは微笑むだけで何も言わなかった。

＊＊＊＊＊

「ふうん……。へぇ……」

黒い制服を着た女の人が、僕を上から下までじろじろとなめ回した。
ずずい、と僕に顔を近付けてきたので、半歩下がり気味にして顔を俯けた。
りっちゃんも同じ制服を着ているから、同じ学校の高校生なんだと思う。

「あんま脅かすなよ。ジンに怒られるぞ？」

女の人のとなりに立っていた志樹さんが言った。
すると女の人は僕から少し遠ざかったが、目は相変わらず僕を捕えたままだ。
鋭いわけじゃない。
だから怖くはなかった。
ただ、少しびっくりしただけで。

「この子がジンさんの花ねぇ……」

そして顎に手を当てた。

「なんか意外」
「そりゃ、な。なんてったって小学生だし」
「そうじゃなくて、」

二人の視線は僕に向けられたまま話は進む。
まだ部屋にさえ入っていない、あの日本風の家の広い玄関で、これは繰り広げられている。
今日は黒いサンダルが一足出ているだけの、綺麗な玄関だった。
ジン、早く帰ってこないかな。

「この子がジンさんの花っていうこと自体が意外なのよね」
「なんで？」
「だってジンさんって……」
「小夜ちゃん。意外でもなんでも、ユウは俺の花なんだから。それでいいでしょ？」

奥からジンが歩いてくるのが見えた。
二人はジンを振り返り、その二人の間を通ってジンは玄関に降りた。
ジンは僕ににっこりと笑い掛け、「待たせてごめんね」と言った。
僕は首を振って返事をした。

「廉浬くんは？」
「今から空手の稽古」
「廉浬くん、空手やってるんだ。すごいね」
「俺もやってたよ。黒帯もらったから、最近はもう稽古はしてないけど」
「ジンもやってたの！？」

目を丸くする僕に、ジンはくすくすと笑って頭を撫でてくれた。
ジンが空手やってただなんて、意外。
黒帯って、すごく強いってことだよね？
ジンって強いの？

「プリサーバーだもの。花を守らなきゃいけないんだから、その程度ならどのプリサーバーでもやるわよ」

志樹さんの横に並ぶ女の人が、腰に手を当てながら教えてくれた。
プリサーバーとしては当然のことなのかな。
そしたら、志樹さんも稀矢さんもできるってこと？

「花って危ないの？」
ジンを見上げると、笑顔なのに少し辛そうな顔をしていた。
「大丈夫。俺が全力で守から」
その時、初めて花であることを不安に感じた。
危ないんだって、子供ながらにわかってしまったから。
ジンは「大丈夫」と言っただけで、否定しなかった。
プリサーバーは、花を危険から守るんだ。
危険ってなんだろう？
いったい何が起きるんだろう？
知りたいことは、まだ誰からも聞いていないことに気付いたけど、
ジンには聞けなかった。
僕が知るということからも、僕を守ろうとしている。
それにも気付いていたから。

＊＊＊＊＊

ジンさんが花である男の子を連れて本家を出て行くのを、志樹と並んで見送った。
わざわざ本家に寄ったのは廉浬を置いていくためだったらしい。
腕組みをして、もういない二人がいた空間を睨み付けた。
「意外っていうか」
「まだその話続いてたのかよ」

志樹が面倒そうに言ったので、軽く睨み付けると黙った。
まぁ、そんなことをしなくても志樹は黙っただろうけど。

「だって気になるじゃない。あのジンさんの花なのよ？」
「小夜はジンをなんだと思ってるんだ？」
「歪んだめちゃくちゃカッコいいお兄さん」
「……俺もそう思う」

志樹ってバカだ。
年上だけど心からそう思う。

「ジンさんの花はめっちゃ歪んでて、ジンさんのこと振り回すような子かと思ってたんだよね」
「……一理ある」
「でも蓋を開けたら、あらびっくり。無垢な小学生の男の子」

あの子は何も知らない白い目をしていた。
当然といえば当然だ。
でもそんなものは理由にならないのがこの家。
あの子があのままでいられるとは思わない。
それはたぶんジンさんも気付いてる。
だからこそ守ろうとしてる。
あの無垢な子供を、すべてのものから守ろうとしている。

「でもさ、案外あの子振り回すタイプかもよ。ジンのこと」
「え？」
「だってジンは歪んでるけど、あの子は子供だからどこまでも真っ直ぐじゃん？タイプ違いすぎるのって大変だし、どっちが合わせるかって言ったら……」

「ジンさんしかいない」
「でしょ？」

一波乱ありそうな予感がする。
果たしてそれは私たち“秋桜”に影響はくるのか、そこが一番の問題なんだろうけど。

2（後書き）

志樹の花の小夜登場。
女子高生さんでしたね。
なんかまた強気のお姉さんになってしまいました……。
最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

3

ジンは余計なことは何も言わない。
聞いたことはちゃんと答えてくれる。
でもなんて聞いたらいいか分からないことは、どうしたらいいの？
僕は知らなくてもいいことなの？

家が近付いた。
ジンに会ったのは昨日が初めてで、一緒に帰るのもまだ二回目。
それでも、もっとずっと一緒にいたいと思った。
それが無理なことも、よく分かってる。

「もうすぐ家だから。ありがとう、ジン」

僕のショルダーバッグはジンの肩にかけられている。
僕がそれに手を伸ばそうとすると、ジンはにっこりと僕の手を阻んだ。

「家の前まで持たせて」
「でも鍵出さなくちゃ」
「鍵？」
「うん。家の鍵」

仕方がないので、ジンが肩から下げている状態でバックを開けた。
教科書とは別の、チャックがついたポケットに鍵を入れている。
いつものようにチャックを開け、中にある車のキーホルダーがついた鍵を手探りで取り出した。

「ユウって鍵っ子？」
「かぎっこ？」
「えーと、帰ったら家には誰もいない？」
「うん」

僕が頷くと、ジンは少し渋い顔をした。
何か気に障ったのかと思いジンを見上げていると、ジンはふいに微笑んだ。
ジンの表情はワンパターン。
どんな表情を作ったとしても、最後には必ず笑いかけてくれるんだ。
それがどんなに嬉しいことか、きっとジンは知らない。

「一緒に待ってようか。お家の人が帰ってくるまで」
「え？」

鍵を握り締めたまま、僕はジンの顔を仰ぎ見た。
相変わらず笑顔のジンは、本当にどこまでも僕に優しくしてくれる。
まるで底無しのように、優しさで溢れている。

「でも……」
「ん？」
「誰もいない時に、家に誰か入れちゃいけないって、お母さんが……」
「そう。なら俺は外でいいよ」

まったく気にした様子のないジンは、当たり前のように言葉を返した。
どうして？
ねぇ、どうしてなの？
ジンは僕に何を望んでいるの？

僕はジンにどう返していけばいいの？

「……なら、僕も外で待つ」

「ユウは家に入りなよ。まだ夕方から寒くなるんだから。俺のことは気にしなくても……」

「気になるもん」

自分からジンの手を握ると、ジンは目をぱちくりさせていた。

あったかいその手は、優しく握り返してくれた。

「ユウは優しいね」

「ジンが優しいから」

「それはユウだからだよ」

「僕もジンだからだよ」

ジンはまた目をぱちくりさせて、くすくすと笑った。

「適わないなぁ」と楽しそうに呟きながら、二人並んで家族の帰りを待った。

何も話さなくてもいいの。

そばにいるだけで、僕は満たされるから。

僕にないものを、ジンはどんどんくれる。

そんな僕は、ジンに何を与えられるんだろう？

家の前の塀に背を預けながら二人で黙って１０分ほど。

少し俯いていた僕に影が差した。

顔を上げると、先程の女の人と同じ制服を着たりっちゃんが立っていた。

パチパチと瞬きを繰り返し、僕とジンに交互に視線を投げ掛けていた。

「りっちゃん、おかえり」
「た、ただいま……」
りっちゃんは戸惑った様子で僕とジンを見つめた。
今更になって、ジンのことをなんと紹介していいのか分からないことに気付いた。
友達、とは違う気がする。
でもそれなりの親密感は持っているし、出会って二日目にして信頼もしている。
花の説明なんかしても、きっとりっちゃんは分からない。
その当事者だってよく理解できてないのだし。
「初めまして。俺は湯川　陣一郎といいます。うちの弟がユウくんと仲良くしていただいてまして」
「え？あ、あぁ、弟……」
りっちゃんは不思議そうな顔をしたあとに、納得した表情を見せた。
弟？と首を捻ってみるが、僕の頭には廉浬くんしか浮かんでこない。
しかし廉浬くんはジンの弟じゃないから、やっぱり嘘なんだろうと思う。
後ろめたさはあったけど、僕は黙ってすべてをジンに任せた。
なんとなく、それが一番いいことのような気がしたから。
「えっと……、弟がお世話になってます。姉の理央です」
りっちゃんは少し頭を下げて、すぐに戻した。
まじまじとジンのことを見つめている。
金髪だからかな、驚いているのかもしれない。
ジンは普段僕に向けるような微笑みをりっちゃんに向け、それから僕を見下ろした。

「それじゃ」
「あ、うん。ありがとう」

ジンは僕に手を振り、来た道を帰っていった。
なぜだかその後ろ姿が見えなくなるまで、僕とりっちゃんは黙って見送っていた。
呆然とした状態でりっちゃんが僕を見下ろしたその顔は、少し頬が赤かった。

「ハーフとかクオーター？めちゃくちゃカッコよくない？」

りっちゃんは興奮気味だったと思う。
そんなりっちゃんを見て、僕は嬉しくなって、少し笑った。

なぜ嬉しかったのかな。
そんなの分かり切ってる。
僕はジンのことが大好きで、まるで自分が褒められているように鼻が高かったから。
ジン。
僕は君がだいすき。
君が僕を守りたいように、僕も君を守りたい。
だから、知りたい。
花とプリサーバーのこと。
知る必要があるんだよ。

3（後書き）

ユウくんのお姉さん、理央さんことりっちゃん登場です。
名前は前から出ていたことは、お気づきになっていたでしょうか？

私には珍しく、登場人物が多いお話になりました。
名前ミスなど、お見苦しい点など多々あるとは思いますが、今回も読んでいただき、ありがとうございました。

4

その日の夜、リビングの電話が鳴った。
食器を洗っていたりっちゃんが台所から「憂、出てー」と言ったので、僕は胸の高さの電話台の電話の受話器を上げた。

「もしもし」
『若槻さんのお宅でしょうか？市立病院の看護師の望月です』

どきっとした。
りっちゃんに視線を向けると、「誰？」と言いたげな表情をしている。
聞かない代わりに、りっちゃんは食器洗いを中断して、電話へと近付いてきた。

『憂くんだよね？お父さんはいる？』
「お父さんはまだ……。お姉ちゃんなら……」
『それじゃあ、お姉さんに替わってもらえる？』

頷いてからりっちゃんに受話器を渡した。
薄々気付いていたかもしれないりっちゃんは、緊張した面持ちで「もしもし」と電話に出た。
お母さんに何かあったのかもしれない。
そんな不安を抱えながらりっちゃんを見上げ、電話の会話を聞いてはみるが、状況はまったく掴めない。
お母さん……。
お母さん、どうかしちゃったの？
きゅうへん、したの？

ジン、僕、どうしよう……。
泣きたいよ、ジン……。
受話器をそっと降ろしたりっちゃんは、短いため息を落としたあとに僕を見下ろした。

「着替えてきな。今から病院行くから」
「お母さんどうしたの？何かあったの？」
「……わかんない。とりあえず準備してきて」

りっちゃんはそれ以上は何も言わなかった。
だから僕も聞いてはいけないんだと思った。
僕は子供だから。
みんな僕を守ろうとするんだ。
子供がそのことに気付いているなんて、大人はきっと知らない。
子供に何も言わないということは、すごく酷なことなんだと。

＊＊＊＊＊

夜の病院は光が少なく、薄暗くて怖いと感じた。
それは幽霊とかそういった類の恐怖ではなくて、もっと別の何かだったと思う。
具体的なことは分からない。
けれど僕の胸の中には、確かに恐怖という名の何かがある。
ジンは、来てくれないんだろうか……。
僕はりっちゃんの後に続くだけで精一杯で、看護師さんが何を言っ

たのかも、いつお父さんが来たのかも、何も分からなかった。
僕に説明してくれる人は誰もなかった。
蚊帳の外にされている僕は、でも僕も家族の一員であるはずなのに。
子供というだけで、何も理解できないと決め付けられる。

「ジン……」

病院の廊下のソファーで一人、初めてジンを口に出して呼んだ。
なんとなく来てくれる気がした。

「ジンっ……ジン……！」

一人の廊下が寂しかったんでも怖かったんでもない。
僕はただ、ジンに逢いたいと思った。
ジンの腕に包まれていたいって、そう思っただけ。

「ユウ……」

息を切らしたジンが、ふと僕の前に現れた。
ジンを見上げると、ジンは荒い呼吸を繰り返しながら、心配そうに
僕を見下ろしていた。
現れるだろうって、確信めいたものがあった。
だから驚きはしなかったけど。

「ちゃんと、来て、くれたんだ」
「当たり前だよ。ユウが俺を呼ぶのなら、俺はどこへだって駆け付
けるよ」

ジンはあたたかい。
今の僕は、たぶんすごく冷たいはずだから。

ジンの懐に飛び込んだ。

「俺がそばにいる。ユウを守ってあげる」

ジンは大きくてあたたかい手で、僕の全身を受け止めてくれた。
だから僕は、ジンにしがみついて泣いた。
どうしてみんな僕を一人にするの？
どうしてジンは僕を一人にしてくれないの？
僕を一人にしないジンは、いつまでも僕のとなりにいてくれるのかな。

僕はジンのとなりに居続けられるんだろうか。

何も聞かないジンに甘えて、僕はただただ黙ってジンの背中にしがみついていた。

＊＊＊＊＊

ずっとだ。
あの子供はずっと自分を呼んでいた。
幸せな家庭があるはずなのに。
守ってくれる家族がいるはずなのに。
なぜ一人でいるような悲しい顔をするの？
なぜ俺を求めているの？
いや、違う。

なぜ俺を求めてくれるの？

「ユウってさ、小５の割にガキだよな」
「ユウも廉里には言われたく言われたくないだろうな」

そう言うと子供は頬を膨らまして怒る。
大人に対しての反発心や抵抗心、そんなものが子供の心にはあって、
それをくすぐれば子供は余計に反発するものなのだと思う。
大人とか子供で区切られるのを嫌っているのだろう。
ユウは廉里の言う通り、素直だからこそ幼く見える印象がある。
でも、あの大人しさや素直さは子供らしからぬ何かを感じる。
自分は子供だからと、すでにあきらめているような……。
それが大人らしい考え方とも気付かずにいるような。

果たして、自分はどこまであの子を守れるんだろう？
いつまで子供でいさせてあげられるんだろう？
そして自分は、いつまで大人らしくいられるんだろう？

4（後書き）

投稿が本当に本当に遅くなってしまい申し訳ないです。
このような拙い小説にも目を通して頂いてる読者様には、本当に頭が上がりません。
今後とも不定期更新ではありますが、何卒宜しくお願い致します。
読んでいただき、ありがとうございました。

5

目を覚ましたお母さんに会えたのは、ジンが来て少ししてからだった。
ベッドに横になりながら僕に微笑むお母さんは、心配かけてごめんねと、しきりに僕たちに謝っていた。
もう心配はいらないよと僕に目線を合わせながら電話の看護師さんが言ったので、僕はなんの疑いもなくほっとした。
それはお父さんもりっちゃんも同じような顔をしていたから。
嘘ではないのだと、少し確信が持てた。

ジンは説明が面倒だと言って、お父さんが呼びに来る直前に病院を出ていった。
「ユウが寂しいと思ったら、どんなときでもいい。俺の名を呼んで。すぐに行くから」と、ジンはそう僕に言い置いて。
お母さんが心配で、ずっとそばにいたいと思ってる。
でも、僕が呼んだら駆けつけてくれるジン。
家族ではないのに暖かな手を僕に与えてくれるジンを、僕は放っておくことが出来なかった。

＊＊＊＊＊

いつもはジンに着いていくような形で手を繋いでいた僕は、今日は僕がジンを引っ張るようにしてあの家へと向かった。

「ユウ？」

ジンは不思議そうな声をあげるが、決して僕の手の流れに逆らおうとはしなかった。
なんとなくだけど、僕がジンをどんなところに連れていこうとしても、ジンはイヤだとは言わないような気がする。
それはただ僕に優しいのではなくて、何かから僕を守ろうとしているのだと感じていた。
ただの予想にしかすぎないことではあるけれど。

「ユウ、どうしたの？もしかして、本家に向かってるの？だとしたら、今日は特に本家に行く用事は……」
「あるよ。聞きたいことがたくさんあるもん」
「聞きたいこと？」

心なしか、繋いだ手に力が加えられたきがする。
ほら、やっぱり。
ジンは僕が思っていたような反応をする。

「聞きたいことがあるなら、俺が答えるよ。わざわざ本家に行かなくてもいいんじゃないかな」

僕が立ち止まると、ジンも同じように足を止めた。
ジンの顔を見上げると、神妙な面持ちで僕を見つめていた。
ジンは優しい。
優しすぎる。
ジンは僕を守ろうとして、きっと身動きが取れなくなってしまうような気がした。

「ジンには聞かない。ジンは大切なことを話してくれないもん」
「ユウ……」

わかってる。
それが僕のためであることも、僕が望むならずっとそのままにしようとしていることも。

「僕は子供だけど、弱虫で泣き虫だけど、ジンが僕を守ってくれるから。だから、僕はジンとのことを知りたいよ。ジンに与えられるだけじゃなくて、僕もジンに何かをあげたい」

ジンは目を大きく見開いて僕を見下ろした。
難しいことはわからないかもしれない。
知ったところで何かをジンに与えられるようになるかもわからない。
それでも僕は知りたいよ。
薔薇の花のことも、そのプリサーバーのジンのことも。
そして、もっともっとたくさんのことを。

「知ることはいいことばかりじゃないかもしれないよ？」
「うん」
「辛いこともあるかもしれないよ？」
「うん」
「聞いたら後戻りはできないよ？」
「うん」
「それでもいいの？」

ジンは念を押すように僕に問いかけた。
それはきっと、辛いことを聞かなきゃいけないと断言されたようで。
もう逃げていたくない。
やられてばかりじゃ何も変えられない。

「どんなに辛くても、ジンはそばにいてくれるでしょ？」

それを教えてくれたのは他ならぬジンなんだ。
僕の普通を変えたのはジンなんだから。

ジンは少し目を細めて微笑んだ。
それは嬉しかったから笑ったのか、呆れた末に笑ったのかはわからなかったけど、ジンが笑っているだけで僕は満足することができた。

＊＊＊＊＊

ジンは本家に着いてすぐに厘矢さんのもとに連れていってくれた。
相変わらず静かな本家は、今日で三回目の訪問にも関わらず慣れた気はしなかった。
その冷たいような家の中にいるせいか、ジンの手の暖かさがいつも以上に際立った。

「陣一郎」

厘矢さんの部屋の前で、稀矢さんがジンを呼び止めた。
前よりも幾分か柔らかくなったような気がする稀矢さんの目を、今日は真正面に受け止めることができた。

「突然すいません、稀矢さん。厘矢さんとお話がしたいのですが」
「あぁ。厘矢も同じことを言っていた」

稀矢さんが僕を無表情で見下ろした。
ジンも同じように僕を見下ろしたまま、何も驚くこともなく黙っていた。

「大切なことを薔薇の花は知る必要がある。それがたとえどんなに幼かったとしても」

結局は誰もが僕を子供だからと心配していたのだと思った。
ついこの間まで誰にも守られずに生きてきた自分。
だからこそ守るのも自分一人だけだった。
守られているということは、守るべき人がいると同義だ。
僕はそれを知っている。

稀矢さんを先頭にして入室した厘矢さんの部屋は、以前と何も変わらなかった。
唯一気付いたのは、窓辺に飾られている生け花の花が変わったことぐらいか。

「よく来てくれたね、ユウくん」

ジンのとなりで、厘矢さんに向き合うように正座をした。
稀矢さんは厘矢さんの少し後ろに座った。

「この間は大変だったそうだね。お母様の具合はいかがかな？」
「あれからはとってもいいみたいです……」

ジンが厘矢さんたちに伝えたのだろう。
そのことには何も思わなかったので、僕はありのままのお母さんの言葉を伝えた。

「ユウくんのお母様はお強い方なんだね」
「え？」
「薔薇の花の産みの親であらせられるのに」

それだけで確証は得られなかったけど。
僕は子供で泣き虫だけど。
涙よりも何よりも衝撃が僕を埋め尽くした。

「花を産むことは本当に大変なことなんだよ。ほとんどの花のお母様は幼いことになくなっていることが多い。花の出産に体力を使いきってしまうんだろうね」

お母さんが病院にいるのも。
りっちゃんが毎日家事をするのも。
お父さんが夜遅くまで働いているのも。

すべてが僕のせいだったんだ。

5（後書き）

２話はこれにて終了です。
なんだかくらーい話になっちゃいましたね…
もっとベタベタな話にするつもりだったのですが……
次回にご期待ください！

お読みいただき、ありがとうございました。

幕間：秋桜の花（前書き）

本編とは直接関係ありません。
読まなくても話は繋がります。

幕間：秋桜の花

久遠家の分家のひとつに生まれた私は、物心つく頃から花の存在もプリサーバーの存在も知っていた。
基本的に久遠家の人間から花は出やすいと言われているが、そのプリサーバーは久遠家の人間からしか排出されていない。
花の存在が公にはされていないことと、代々昔からの血筋が関係しているからだと皆は口を揃えて言っていた。
そのため、私も久遠家の人間として、それなりにプリサーバーの訓練なるものは一通り受けてはいる。
いつどの段階でプリサーバーとして目覚めるか、はたまた花として蕾から開花するのか、それは神のぞ知る領域だ。
プリサーバーは花よりも速い段階でプリサーバーとして開花する。
花の方が先に開花していてはもしもの時に危険だし、そもそもそんなことは過去に一度だってなかった。

私が花として開花したのは、高校一年生の冬。
今より約1年前の時だった。
部活も入らず、適当に勉強して、なんとなく友達と笑って。
この頃にはプリサーバーとしての訓練もとっくに諦めて止めていた。
小さい頃から運動神経がない私に、やれ空手だの格闘技だの、できるわけがない。
そんな私がプリサーバーのはずがないと、いつの間にかサボり癖がつき、自然と本家にも行かなくなっていた。
何をやっても長続きはしなかったし、それに対しなんの感情も湧かない退屈な人間だったと思う。

「小夜、帰りに厘矢さんにこれ届けてくれないか？」

なんでもない普通の日に、父は私にお菓子らしき箱を差し出した。
勝手に空手をサボっている私が、突然本家な乗り込むのは避けたいことではある。
渋い顔を作って抵抗を試みたが、父は気にした様子もなく微笑んだ。

「陣一郎くんも志樹くんも行くらしいからさ。たまにはお話してきたら？志樹くんなんかはなんだから」

話すことないし……。
そう言い返そうと思ってやめた。
確かにジンちゃんには会いたい。
なんてったってカッコいいし。
友達にジンちゃんの写真を見せると、ちょっとした人気者になれるのだ。
またあのカッコいいスタイルに影のある性格が女子の心をつかんで離さなかった。
そうして私は父に促されるまま本家へと向かった。

＊＊＊＊＊

相変わらず本家は重々しさと品の良さを感じさせた。
先代の当主が亡くなられて早3年、今はその息子である厘矢さんが久遠家の当主だ。
牡丹の花であるというだけでも大変だというのに更に当主というのだから、心労は絶えないだろう。
それでも厘矢さんはいつも笑顔だ。

尊敬する人は？と聞かれれば、私は間違いなく厘矢さんを挙げる。

「あぁ、小夜。随分と久しぶりじゃない」

「ご無沙汰してます、厘矢さん。しばらく顔を出さなくてすみません。これ父から……」

畳の上に置き、滑らせるようにして厘矢さんの前まで差し出す。

厘矢さんは「ありがとう」と微笑んだが、そのすぐ後に首をかしげた。

もう３０代半ばだというのに、この仕草が可愛く見えてしまうのが不思議だ。

「これは？」

「箱菓子……、じゃないですか？」

「今日何かの日だったかなぁ……？」

厘矢さんは更に首をかしげた。

私も父に言われるがままに持ってきただけなので、深い理由までは考えていなかった。

父の心意を知らない私が厘矢さんの疑問を解決できるはずもないため、私はそそくさと当主部屋を後にした。

居間には父の言う通り、ジンちゃんと志樹、そして蓮華の花とプリサーバーが揃って座っていた。

どれも久しぶりな顔で、どこか私を安心させる空気があった。

「小夜ちゃん！久しぶりぃ！」

満面の笑みで私を迎えた蓮華の花の鈴鹿の横に腰を下ろした。

鈴鹿の反対側にくっつくようにして座っているプリサーバーの彩乃

は、「こんにちは」と小さい声で呟いた。

「最近ずーっと来てなかったでしょ？」

「だって用事なかったんだもん」

「倉田先生が怒ってたよ。小夜が来ない！って」

ジンちゃんがテーブルに頬杖をついてクスクス笑った。

倉田先生は久遠家専属の空手の先生だ。

女だてらに男顔負けの強さを誇っているらしい。

久遠家と遠い親戚にあたるとかなんとか。

「もういいの。そういう体術系は諦めたから」

「諦めたって？」

「いくらやっても上手くならないんだもの。そんな人がプリサーバーのわけないじゃん、と思って」

空手も格闘技も、全ては花を守るために覚えるものだ。

それが上手くならないというのは、プリサーバーとしては致命的である。

「小夜ちゃんらしいね」

鈴鹿もジンちゃんと同じようにクスクス笑った。

そう？という目を向けると、二人してこくこくと頷いた。

「その判断間違ってないと思う」

今まで一言も口を開かなかった志樹が真顔で言った。

確かもう秋桜のプリサーバーとして覚醒したと父が言っていたと思う。

今は花探しに忙しいのだろうか。

「今日小夜ちゃんをここに呼んでもらうように頼んだの、俺なの」

にこりともしない真剣な志樹は、会うのが久しぶりとはいえ、珍しいことに変わりはなかった。

そもそもさっきまで黙っていたのが不思議なぐらいだ。

志樹とは久遠家繋がりで、昔からの顔馴染みだ。

ジンちゃんよりも付き合いは長いし、幼なじみというものに近いと思う。

「頼んだって、誰に？」

「小夜ちゃんのお父さん」

つまり、厘矢さんへのあの箱菓子は口実だったということか？

厘矢さんを悩ませるようなことをして、少しは人の迷惑を考えろよ！って感じだ。

言わなかったのは、私の知っているどの志樹よりも真剣な顔をしていたからだ。

いつもヘラヘラしている奴だと思っていたのに……。

「半信半疑だったけど、会って確信した。小夜ちゃんは秋桜の花だ」

「は？」

あまりにもあっさり言われて、私はすっとんきょうな声を上げた。

蓮華の二人もジンちゃんもきょとんとしていたようなので、やはり志樹は驚きたくなるようなことをさらっと言ったのだ。

＊＊＊＊＊

「小夜ー！」

校門のところでヒラヒラと私に手を振る志樹は、毎日毎日飽きることなく、甲斐甲斐しいまでに高校に通っている。
その近くにはバイクがあって、そのバイクには私専用のピンクのラインが入ったヘルメットがある。
同じ制服を着た両脇の友達は、やはり今日もクスクスと笑った。

「今日もお迎えかー」
「いいなー。毎日笑顔でお迎えなんて羨ましい！」
「いつものことでしょ」

そう口ではなんでもないことのように言うけれど、本当は少し優越感。
いろいろ説明が面倒なので彼氏ということにしているが、それも本当は少し本気だったり。
相変わらず学校での毎日はいつも通りだし、日々は淡々と過ぎているように見える。
でも私は確かに変わったのだ。

志樹との毎日、秋桜としての日々。
私は枯れるまで彼と共に歩もうと決意した。
この先何があろうとも、だ。

「今日も安全だった？」
「分かってるくせに聞かないでくれる？」
「まぁ……。でも薔薇の花も咲いたしさ、そろそろ本格的な革命起きると思うとさ……」

「情けない顔しないでよね。プリサーバーでしょ」
「そうだけどさ……」
「何かあれば迷わず志樹を呼ぶわよ。だから志樹は今まで通り、私を迎えに来てくれればいいの」

志樹は一拍置いてから笑い、うんと頷いた。
私たちは繋がっている。
たとえ革命が起きたとしても、それは変わらない。

幕間：秋桜の花（後書き）

今回の幕間は秋桜の花の小夜ちゃんにスポットを当てました。
途中いろいろと省きましたが、今後、志樹視点で描きたいなぁと思いまして……。
消化不良を感じられた読者様、申し訳ありません。
次話からまた本編が始まります。
ユウをよろしくお願いいたします。

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8091n/

花のPreserver～薔薇の花～

2011年10月10日11時41分発行